

アダム・プシェヴォスキ著、粕谷祐子・山田安珠訳『それでも選挙に行く理由』

白水社（2021年）

選挙には失望がつきまとう。選挙の結果は期待通りになるわけではないし、選挙で選ばれた政治家や政府に対して不満を感じることも多々ある。はたして選挙には政治システムとしてどのような価値があるのか。本書では選挙の分析を通じて、その限界と本質的な価値が示されている。

著者は選挙の限界や制約の一つとして、選挙が公正・清廉ではないことを指摘する。選挙では有権者が自らの選好に応じて自由に投票を行う権利を持つという前提にも関わらず、歴史的にみると現職の再選率が高いことが示される。その一原因として、与党多数派が自らの利益になるように選挙制度を操作できることがあげられている。例えば、アメリカの州知事グリーが自党に有利な選挙区の区割りを編成した結果、その形がサラマンダーに似ていたことから、選挙区の区割りを恣意的に編成することは「ゲリマンダー」と呼称されるようになった。

著者はこうした選挙の限界や制約を踏まえつつ、選挙に期待される機能の分析と棄却を通じて、選挙の本質的価値を明らかにする。分析の一つに選挙と経済的平等の関係を上げている。貧困層が多数派として富裕層から財産を没収することを受容してきたという選挙の歴史からすれば、選挙は再分配を通じた経済的平等をもたらすことが期待される。しかし実際には、独裁体制と民主主義とでは所得の不平等には大差がなく、また、経済的不平等の程度が高い場合には、不平等が進むほど逆に再分配がなくなるという。つまり分析からは、民主主義は選挙を通じた経済的不平等を是正するための効果を持たないことが示される。

では選挙の本質的な価値はなにか。著者は、それを「社会で紛争が起こった場合に、ある程度の事由を伴って平和裡にそれを解決でき、暴力による紛争の解決を防ぐこと」と述べる。つまり選挙は、その結果に対して期待や失望が入り交じるとしても、暴力やクーデターを伴うことなく、相対する政治勢力がルールに従って勝者と敗者に分かれることを可能にする。このように選挙が競合性を持ちながら機能するための条件として、選挙で「賭けられるもの」が少ないことが重要であるという。例えば選挙での敗北が命や自由を脅かす場合、つまり敗北の代償が高すぎる場合、暴力を伴ってでも現職の地位や権力を維持しようとするだろうし、逆に野党は権力を握ろうとすることが考えられる。

選挙は限界と制約を持つにもかかわらず、多くの国で競合的な選挙が行われており、多くの人が失望を経験したとしても再び選挙に向かう。民主主義において選挙によって変わる政治システムが生じづらいのは、選挙の本質的価値が機能しているからであるだろうし、また著者が述べるように「統治するものを選ぶにあたり、選挙よりもましな方法がない」からなのであろう。著者の分析を通じた選挙の本質的価値を踏まえれば、選挙が完全無欠な政治システムではないにしても、悲観的になる必要はないと思えてくる。（中川 敬士）